

## ソ連時代の中央アジア史研究のための モスクワ公文書館・図書館案内

地 田 徹 朗

筆者は日露青年交流センター若手研究者フェローに採用され、2005年12月10日から2006年12月9日までロシア連邦モスクワ市にあるロシア国立人文大学に研究生の身分で滞在した。筆者の研究テーマは戦後期からソ連邦崩壊までの中央アジア政治史であり、これまでは新聞資料と政治エリートのバイオグラフィー・データを主な一次資料として共産党エリート人事をめぐるソ連邦中央・共和国関係について研究してきた。しかし、これらの資料のみでの研究には限界を感じており、今回の留学では公文書資料を用いて自らの研究を見直すことが第一課題であった。

すでにクルグズスタンではクルグズ共和国中央国立政治文書館 (ЦГА ПД КР) で共産党公文書資料の収集を始めているが、戦後期となると閲覧できる資料はかなり限定されてしまっている<sup>(1)</sup>。ソ連邦の首都であったモスクワに所蔵されている公文書の開示状況はやはり不十分だとはいえ、中央アジア諸国よりもはるかに良いと考えられる。ソ連邦共産党中央委員会は継続的に共和国からの情報を収集すると共に、共和国側からのソ連邦中央への要望の類、共和国内で何か問題が生じた際の調査報告書、問題・欠陥を告発する手紙の類はモスクワの公文書館に保管されている。特に、党・国家行政システムがすでに確立し、ソ連邦中央が共和国政治に恒常的に介入する権限を有していた（但し、常に介入していたとは限らない）戦後期の共和国政治史や連邦中央・共和国関係を研究する場合、各国にある公文書と連邦中央の公文書双方を突き合わせる作業が不可欠となる（但し、トルクメニスタンなど国の事情によってモスクワの資料のみで研究せねばならない場合もあり得る）。本稿では、筆者が利用したモスクワの公文書館及び図書館及びそこでの所蔵資料の特徴について、筆者が

<sup>(1)</sup> この点については、拙稿「ソ連時代の遺産と自立との狭間で：クルグズ共和国中央国家政治文書館」『アジア研ワールド・トレンド』第114号、2005年、22-23頁。及び秋山徹氏による同公文書館の紹介である「クルグズスタン文書館作業記」『日本中央アジア学会報』第2号、2006年、22-23頁を参照のこと。

閲覧した文書を中心に紹介する<sup>(2)</sup>。

ロシア国立現代史文書館 (Российский государственный архив новейшей истории: РГАНИ)

住所：ул. Ильинка д.12, подъезд 8 (地下鉄「Китай-город」「Площадь революции」駅)

電話：+7 495-606-50-30 (事務局)、+7 495-606-38-15 (閲覧室)

開館日：火・水・木曜日のみ。9:30 から 17:00 まで。

所蔵文書の特徴:РГАНИは筆者が最も足しげく通った公文書館である。スターリンの死後1953年から1991年までのソ連邦共産党(以下、「党」)中央委員会の文書を主に所蔵している<sup>(3)</sup>。中央アジア地域に関連する文書が含まれているフォンドで閲覧できるものは現状ではかなり制限があり、党中央委員会幹部会・政治局(фонд3)、書記局(фонд4)といったソ連邦の政治決定の中枢を担っていた組織の文書はほとんどが非公開である<sup>(4)</sup>。党大会(фонд1)、党中央委員会総会(фонд2)、党中央委員会ロシア共和国ビューロー(1956-1966)(фонд13)については完全公開、党中央委員会機構(部 отделы)(фонд5)、党中央委員会付属党統制委員会(фонд6)については部分公開である。また、中央アジア地域関連だと1962年から1964年にかけて設置された党中央委員会中央アジアビューローの史書(фонд20)も存在するが、筆者はまだ未見であり、実際に閲覧できるのかどうかも分からない。筆者

<sup>(2)</sup> ロシア連邦の最新の公文書館情報を入手するためにはロシア連邦公文書局による情報サイト「ロシアの公文書(Архивы России)」が便利である(<http://www.rusarchives.ru/>)。また、以下に述べる公文書館の文書でマイクロフィルム化されたものがアメリカで売り出され、北海道大学スラヴ研究センターなど日本で所蔵されているものもある。また、多くのテーマ別文書集が書籍の形で刊行されている。2000年までにロシアで刊行された文書集についてはОткрытый архив-2: Справочник сборников документов, вышедших в свет в отечественных издательствах в 1917-2000 гг. -М.: РОССПЭН, 2005 が便利なビブリオグラフィとなっている。

<sup>(3)</sup> 所蔵文書についてはガイドブックが刊行されている。Российский государственный архив новейшей истории. Путеводитель. Вып. 1. -М.: РОССПЭН, 2004 ; また、フルシチョフ時代の文化部、科学・高等教育機関部については公開データベースのタイトルを取めたカタログが刊行されている。Отдел культуры ЦК КПСС. 1953-1966: Справочник. (Аннотированные описи). -М.: РОССПЭН, 2004; Отдел науки ЦК КПСС. 1953-1966: Справочник. (Аннотированные описи). -М.: РОССПЭН, 2006.

<sup>(4)</sup> 一部、公開文書のコピーが фонд 89 にまとめて収められている。このフォンドについては、Архивы Кремля и Старой площади. Документы по «делу КПСС». Аннотированный справочник документов, представленных в Конституционный суд Российской Федерации по «делу КПСС». -Новосибирск: Сибирский хронограф, 1995 という便利な文書カタログがある。また、公開分の1954年から1964年の幹部会会議の議事メモ(черновые протокольные записи)、速記録(ごく一部)、決議が3巻本の書籍の形で、現在2巻まで刊行されている。Президиум ЦК КПСС. 1954-1964. Черновые протокольные записи заседаний. Стенограммы. Постановления. Т.1.: Черновые протокольные записи заседаний. Стенограммы. -М.: РОССПЭН, 2004; Президиум ЦК КПСС. 1954-1964. Черновые протокольные записи заседаний. Стенограммы. Постановления. Т.2.: Постановления, 1954-1958. -М.: РОССПЭН, 2006.

が主に閲覧したのは党中央委員会連邦共和国党機関部 (фонд 5, опись 31; 1954-1965) の文書である。同部には地域別 (共和国別ではない) の課があり、主にカザフスタン・中央アジア課の文書を閲覧した。ちなみに、産業部門別の部 (農業部、建設部など) や宣伝・宣動部、科学・教育機関部、文化部などは地域別ではなく小部門別に課が分けられており、中央アジア地域に関連する文書はオーピシを参照しつつ探し出さなければならない。

РГАНИで主に閲覧することになる「部」の文書は①より上位の機関であるソ連邦共産党中央委員会政治局・書記局会議で取り上げられなかった案件 (つまり、部内で全て処理したか、部からさらに下級の党機関に処理を委任したか、書記には会議で検討することなく文書閲覧・稟議のみで済ませて部で実質的な処理を行った案件)、②取り上げられたものの採決にかけられず「部」に対策を一任した案件 (つまり、政治局・書記局会議の議事録に掲載されなかった案件; 書記局、書記本人から、あるいは部長・部次長を経由して部内で処理するよう指示するメモがしばしば加筆・添付されている) についてのみ文書が保存されている。つまり、「部」の文書内容は「最重要案件」ではなく、「二義的な案件」なわけである。しかし、スターリン死去以降の政治局・書記局文書はその大部分が未だに機密解除されておらず、また、部内で検討すらせずに終わったような「三義的な案件」はそもそも公文書として残らないか、文書管理及び他部局への文書転送が専門の総務部 (Общий отдел) 文書ファイルにまとめて保管されているわけなので、「部」の文書から一定の傾向をつかむ意義は十分にあると考えている。また、政治局・書記局で決議を取られた案件に関連する文書が「部」の文書ファイルに残っていることは往々にしてあり得る。

利用環境: РГАНИはロシア連邦大統領府の建物内部にある。利用には姓名、所属研究機関、研究テーマ、対象とする時期が明記された申請書 (заявление) ないし紹介状が必要で、事前にファックスなどで送信しておくといよい (2006年12月20日現在、ファックスの送信がうまくいかない)。ロシア入国後に入館手続きをする場合、初日には入館できず、申請書を渡すのみで、概ねその翌々開館日から入館可能。入館時に入口備え付けの電話機で館員を呼び出し、守衛による名簿のチェックを経ねばならない。その際、パスポートチェックや荷物検査を求められることがある。文書 (чееро дело) は請求して翌々営業日によりやく閲覧できる。館内ではノートパソコンやデジタルカメラの利用不可。手書きによる転写が基本である。これは大統領府内ということもあり、セキュリティ上の問題のようだ。コピーは1枚当たり約3ユーロと恐ろしく高額で、年間150枚というコピー枚数の制限があるため頻繁には利用できない。なお、7月は完全休館である。

閲覧室にはマイクロリーダーが新式・旧式を含めて数台しかないが、閲覧者でこれらのリーダー全てが占有されることは稀である。基本的に1970年以前の文書はマイクロ化されて

おり、原本の閲覧はできない。また、部分公開扱いのチェーロ（あるいは数チェーロが収められたマイクロフィルムに非公開文書が含まれている場合）は通常の閲覧室の隣にある「部分公開文書閲覧室」でアルヒビストのニーナ・ニキフォロヴナの監視の下、文書を閲覧することになる。なお、一度にマイクロフィルム・フィッシュは5本、チェーロは10冊（фонд 89に限り20冊）まで請求できる。

ここまで書くと、利用環境が極めて悪そうに見えるが（実際に決して良くはない）、いくつか利点もある。まず、閲覧室長のリュドミラ・イヴァノヴナ、アルヒビストのニーナ・ニキフォロヴナはとても親切で、文書内容の疑問点や手書きの筆記体の解読など質問をすると丁寧に答えてくれる。また、部の文書には文書をチェックした（つまり、稟議の場合を除いて、案件の担当者である）ことを示す党中央委員会書記などの署名が記されている場合があるが、政治局員（幹部会員）、書記、部長、第一部次長については「署名便覧」なるものがあり、誰のものか把握することができる。また、パソコンを使えないがゆえに慎重に転写する文書を選ばねばならず、結果的に文書内容も頭の中に残る。長期間、単調な内容の文書と悪戦苦闘したが、結果的にソ連邦の文書システムを理解し、文書の読み方を身につける上で重要な訓練の機会であった。

#### ロシア国立社会政治史文書館（Российский государственный архив социально-политической истории: РГАСПИ）

住所：ул. Большая Дмитровка д.15（地下鉄：「Пушкинская」「Чеховская」「Охотный ряд」「Театральная」駅）

電話：+7 495-694-40-34（1番閲覧室：ソ連邦共産党関連）<sup>(5)</sup>

開館日：月（12:00-20:00）、水（10:00-18:00）、金（9:30-16:00）（1番閲覧室）

所蔵文書の特徴：РГАСПИは主に革命前の社会主義運動関連文書からスターリン期までのソ連邦共産党文書を所蔵している<sup>(6)</sup>。一部のファンドに関してはスターリン期以降の文書も保存している。筆者が閲覧したのは党中央委員会連邦共和国党機関部党情報課（фонд 17, опись 89-95; 1959-1965）の文書である<sup>(7)</sup>。ここには共和国共産党中央委員会及び州党委員会

<sup>(5)</sup> 他にコミンテルン関連文書の2番閲覧室、コムソモール関連文書の3番閲覧室があるが、筆者は利用していないため、情報は省略する。

<sup>(6)</sup> この文書館のガイドブックについては以下の通り。Российский государственный архив социально-политической истории: Краткий справочник. -М.: РОССПЭН, 2004；また、РГАСПИのHPでもファンド名を知ることはできる（<http://www.rgasp.ru/>）。

<sup>(7)</sup> 1946年以降、別の時期の同様の文書は фонд 17, оп.46-58, 103-106, 139-143, 145-160 に収められている。なお、2007年1月に1953年以降の同課の文書はモスクワ市郊外の保管庫に移され、請求の段階で1チェーロ約19ユーロという法外な額の「輸送費」が必要になってしまった。

のビューロー・幹部会、書記局会議の議事録、共和国共産党大会、共和国共産党中央委員会総会、州党委員会協議会、州党委員会総会の議事録及び速記録などが収められている。これらの文書は上記の会議について共和国レベルでは2部、州レベルでは3部（より多く）作成し、うち1部がソ連邦中央に送付されていた。ソ連全土について1年1オーピシでまとめたものが上記文書である。つまり、上記文書は基本的に共和国レベルの公文書館で閲覧できるものと同内容なわけである。但し、上記会議の議事録には決議の採決のために利用した諸文書（請願、メモ、部や下級党組織による報告など）は別綴じでチェーロが必ず存在している。これはモスクワには送られず、各共和国・州の公文書館に保管されている。また、「特別ファイル (особая папка)」行きとなったビューローや書記局での決定は議事録には決議番号と発言者に関する情報が記されるのみで、決議内容部分には「決定—特別ファイル (Решение—особая папка)」とのみ記され、РГАСПИではその正確な内容（「発言者」から内容を推測することは場合によっては可能である）を知ることはできない<sup>6)</sup>。もちろん、各共和国の公文書館では「特別ファイル」は別にオーピシが存在するはずであるが、少なくとも ЦГА ПД КР では時期に関係なく現在も非公開であり、完全にお手上げである。他の中央アジア諸国でも状況は変わらないと推測される。モスクワの政治局での「特別ファイル」には（少なくとも、スターリン時代については）外交・通商問題など最重要機密事項に関する文書が収められたそうだが<sup>7)</sup>、共和国や州レベルの「特別ファイル」については党・国家高級幹部の更迭、幹部・市民の自殺（特に農村女性の焼身自殺）、民族間暴動といった秘匿を要する個人情報を含む決定が中心だという印象がある。

РГАНИで閲覧した連邦共和国党機関部の文書に記されている諸問題の多くは最終的な解決を共和国共産党中央委員会や州党委員会に指示しており、РГАНИの文書を手がかりとして РГАСПИ で共和国レベルの関連文書を参照し、どのような案件がどこ（ソ連邦中央か共和国か）で検討され、それが時系列でどのように変化したかを整理することで、ソ連邦の中央・共和国関係の変化を概ね把握することができる。また、РГАНИの政治局・書記局文書はそのほとんどが非公開であることは前述した通りだが、共和国党中央委員会ビューロー・幹部会決議ではしばしばソ連邦中央の党中央委員会決議、政治局・書記局決議を参照・引用している。これによって、共和国レベルで検討された案件がモスクワの共産党の最高意思

<sup>6)</sup> 共和国党中央委員会の「特別ファイル」についてはモスクワに全く文書が存在しないか、あるいは未だ機密扱いでロシア連邦大統領アルヒーフに文書が眠っている可能性がある。

<sup>7)</sup> これについては、富田武『スターリニズムの統治構造：1930年代ソ連の政策決定と国民統合』岩波書店、1996年、110-111頁を参照。

決定機関でも検討されたものだったのかどうかある程度の情報は得ることができる。但し、共和国レベルでの「政治過程」についてはРГАСПИの資料だけでは分からない。これは改めて共和国レベルの公文書館で資料収集をする必要がある。また、公開されている公文書だけでは分からない情報も多々ある（例えば、党幹部人事の選抜「過程」について）。

利用環境：РГАСПИでも利用には姓名、所属研究機関、研究テーマ、対象とする時期が明記された紹介状（年をまたがって利用する場合、2年目以降は申請書のみでよい）が必要である。РГАНИと異なり初回利用時に年末までの入館証が手渡され、即日オーピシの閲覧と文書の請求ができる。一度にできるチェーロの数に制限はないが、全て一度で出してくるわけではない。フォンドによって閲覧室に文書が届く日数がまちまちなため、文書を請求した翌々開館日以降に電話で確認するとよい。フォンドによってマイクロフィルムの場合とチェーロ本体が出てくる場合とがある。各閲覧者に文書保管室のロッカーキーが割り当てられ、完全に返却する場合を除き、出てきた文書を各自で管理する仕組みになっている。ノートパソコンの利用は登録時に申請すれば可能だが（デジタルカメラ利用は不可）、電源コードをつなぐことはできず、容量の大きいバッテリーを複数持参することが必須である。コピーは1枚約1ユーロとやはり高額で、年間400枚のコピー枚数制限がある。なお、8月は完全休館である。

閲覧室は常に薄暗く、とにかく殺風景である。筆者は閲覧室ではチェーロしか見ていないため、マイクロリーダーの状態は分からない。閲覧室長はイリーナ・ニコラエヴナという女性で、対応は事務的だが質問には丁寧に答えてくれる。しかし、文書・オーピシの管理を担当するミハイルさんというアルヒビストはやや気難しく、閲覧者としてしばしば口論になっているのを耳にする。初回利用時はミハイルさんが閲覧者の研究テーマを見てオーピシを選定するため、想定していた文書をすぐに請求できるとは限らない。怒られても気にすることなく、根気強く自らが見たいオーピシを出してくれるようやんわり説得することが重要である。ミハイルさんも文書内容についての質問には（その日の機嫌によって口調は変わってくるが）丁寧に教えてくれる。可能ならば、ミハイルさんが席を離れているタイミングでイリーナ・ニコラエヴナや他のアルヒビストにオーピシを出してくれるよう頼むのがよい。РГАСПИでは辛抱強さとタイミングが重要である。

ロシア連邦国立文書館 (Государственный архив Российской Федерации: ГА РФ)

ロシア国立経済文書館 (Российский государственный архив экономики: РГАЭ)

住所：(両文書館共通) ул. Большая Пироговская д.17 (地下鉄：「Фрунзенская」駅)

電話：+7 495-245-81-61 (ГА РФ 1番閲覧室：ロシア帝国、ソ連邦、ソ連邦崩壊後のロシア)

連邦国家文書<sup>(10)</sup>、+7 495-245-81-17 (РГАЭ 閲覧室)

開館日：(両文書館共通) 月・水 (12:00-20:00)、火・木 (10:00-18:00)、金 (10:00-16:00)

所蔵文書の特徴：ソ連邦の議会・政府・省庁といった国家機関の文書を所蔵するのが両文書館である<sup>(11)</sup>。両文書館は閲覧室を共有するが、文書の請求・受け取り窓口は別となっている。ソ連邦最高会議、人民委員会議・閣僚会議（政府）といった国家機関や高等教育省、保健省、内務省といった非経済関係省庁の公文書・行政文書を所蔵するのがГА РФであり、ソ連邦国家計画委員会、農業省、機械製作省、国民経済会議といった経済関係省庁・国家機関の文書がРГАЭに所蔵されている。

筆者が主に閲覧したのはソ連邦人民代議員大会（1989-1991）(ф.Р-9654) 文書である。うち、ソ連邦最高会議民族会議の民族政策・民族間関係委員会 (оп.7, д.1050-1127) の文書を主に閲覧した。ここにはクルグズスタンとタジキスタンの境界紛争問題、オシシュ事件といった民族間紛争に関する委員会による調査結果や見解、1991年の8月クーデターで頓挫する新連邦条約の審議過程と共和国側からの意見・要求などを知ることができる。同委員会の議事録を読んでいると、発足当初は共産党からの影響を強く受けているが、時間の経過と共に議会が党から自立していく様子が詳らかに分かる。

ソ連邦人民委員会議・閣僚会議 (ф.Р-5446) の文書であるが、最終的な決定 (оп.1) そのものは1950年分までしか原則公開されておらず、かつ機密扱いの決定も非常に多い。ただし、それ以降の分についても各省の省令の中に関連する閣僚会議決定が全文掲載されている場合がある。閣僚会議内部の機構の文書については若干公開状態がよいようだが、筆者は未見である。

省庁の文書についてはソ連邦高等教育省 (ф.Р-9396) の文書を閲覧した。同省官房 (оп.1) ファイルの中には、省令や参与会 (коллегия) の議事録だけでなく、ソ連邦中央・地方の党・国家機関との通信文書を収めたヂェーロがあり、個別の政策実施について検討する場合、党だけでなく国家機関の文書も合わせて閲覧し、両者の関係性の把握に努めることが必要だと言える。さらに、モスクワの国家機関の文書と共和国の国家機関の文書を共和国レベルの

<sup>(10)</sup> これ以外に、ソ連時代のロシア共和国の国家文書を所蔵する2番閲覧室があるが、住所が全く異なる (Бережковская наб. д.26)。筆者は利用していないため、情報は省略する。

<sup>(11)</sup> ГА РФ のソ連邦国家機関に関する所蔵文書のガイドブックは以下の通り。Государственный архив Российской Федерации: Путеводитель. Т.3. Фонды Государственного архива Российской Федерации по истории СССР. -М.: 1997 ; РГАЭ については3冊のガイドブックがすでに刊行されている。Российский Государственный Архив Экономики. Путеводитель. Выпуск 1. Крапкий справочник фондов. -М.: 1994; Российский Государственный Архив Экономики. Путеводитель. Выпуск 2. Справочник фондов РГАЭ. -М.: 1996; Российский Государственный Архив Экономики. Путеводитель. Выпуск 3. Фонды личного происхождения. -М.: 2001.

公文書館で照らし合わせることが望ましい。

利用環境：ГА РФ、РГАЭとも利用には所属研究機関の紹介状が必要。閲覧室は共用だが、紹介状は別々に必要なので注意。同じ敷地内にあるロシア国立古文書館（РГАДА）についても同様<sup>(12)</sup>。入口から入って右手の入館受付窓口で登録。初回は仮の入館証が手渡され、概ね翌々営業日に年末までの入館証が手渡される。ノートパソコンを利用する場合は「コンピューター利用」というスタンプを入館証に押しもらう。パスポートと入館証を守衛に見せて館内に入る。

閲覧室は常に薄暗く（卓上ランプが全ての席に備え付けられてはいない）、とにかく広いのと天井が高いため冬場は暖房効率が悪く寒い。また、夏場の6・7月は込み合うため（8月は完全休館）、開館と同時に入館しないと席に空きがないこともしばしばである。全てのオーピシが閲覧室にあるわけではなく、フォンドによっては指示された別棟の書庫でオーピシを書き写さねばならない。一度の請求で10チェーロまで請求可能（ロシア帝国関連文書はマイクロフィルムが中心のようだが、一度にいくつ請求できるのかは不明）。複数のフォンドからチェーロを請求する場合は別々の請求用紙に記入する。概ね3営業日後に文書が出てくる。ノートパソコンの利用ができ電源コードも繋げるため効率的に作業ができる（但し、電源はいつも取り合いである。夏場は延長コードを持参するのが望ましい）。コピーはГА РФでA4サイズ1枚15ルーブル、РГАЭでA4サイズ1枚10ルーブルとそれほど高くない。但し、ГА РФの文書をコピーするには注文後、各自が別棟にある館長事務局と会計掛に承認印の押印のために出向かねばならず、さらに入金はСбербанк Россииへの銀行振り込みのため、極めて面倒である（РГАЭではコピーサービス未利用のため詳細不明）。コピー受け取りまでの日数も担当のリュドミラ・イヴァノヴナの忙しさ次第であり、即日から二週間後までとまちまちである。ГА РФ閲覧室長のニーナ・イヴァノヴナは閲覧者の多さからいつも忙しそうにしているが、とてもいい人で、こちらの質問にも快く答えてくれる。コピーの不便さを除いてはストレスなく利用できる公文書館だと言える。

### モスクワの図書館

モスクワでソ連時代の中央アジア史研究のために利用すべき図書館はいくつかある。ロシア国立図書館（通称「レーニン図書館」）、ロシア国立公共歴史図書館（通称「歴史図書館」）、ロシア科学アカデミー社会科学情報研究所図書館（通称「ИНИОН」）、中央学術農業図書館

<sup>(12)</sup> この公文書館についての情報は濱本真美氏によるイスラーム地域研究東京大学研究拠点HPの出張報告を参照（<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/centralcurasia/report/index.htm>）。



(通称「農業図書館」) などがある<sup>(13)</sup>。

レーニン図書館本館ではソ連時代の書籍・雑誌は概ね揃うが、館内で未だ改装工事が行われており、その関係で出てこない文献も多い。14時半までの請求なら、請求から2時間後には閲覧可能で、コピーも即日1時間後にはできるため、素早く作業できることが利点である。また、ここ数年の学位論文がデータベース化され、コンピューター室で無料で検索・閲覧できることも素晴らしい。レーニン図書館の別館ではソ連時代からの学位論文本体や旧ソ連邦共和国内の地区レベルの新聞（ロシア語以外のものも含む）まで所蔵があるが、モスクワ北隣のヒムキ市にありアクセスが大変である。

歴史図書館はヒムキに出向かなくてもソ連時代の共和国党・国家機関紙を閲覧でき、かつ新聞のデジカメコピーを行ってくれるため頻繁に通っている。また、コンピューター・カタログで2000年以降刊行の雑誌記事（論文）検索ができるため、これも便利である。ソ連時代の中央アジア諸共和国で刊行された書籍も多く所蔵しているが、書庫を別の場所に一部移したようで、その関係で出てこない文献も多い。利用に際し、博士課程の学生以上の場合は英文の学位証明（あるいはそれに順ずる書類）を提示すれば研究者用閲覧室の入館証が発行される。

ИНИОНは名前の通り、人文・社会科学系の図書を多く所蔵している。筆者は未だカード検索を行っただけで実際に利用はしていないが、レーニン図書館や歴史図書館で所蔵がないか、出してくれない文献が数多く所蔵されている。なお、利用には所属研究機関の紹介状が必要である。

農業図書館は筆者はまだ利用したことがないが、農業関連書籍は充実していると聞く。

いずれの図書館でも中央アジア諸国の現地図書館で見つからなかった文献が出てくることしばしばあるので、探してみる価値はある。なお、いずれの図書館もソ連邦崩壊後に刊行された中央アジア諸国の書籍についてシステムティックに収集してはいないようだ。

以上、ソ連時代の戦後中央アジア史を研究する上でのモスクワの公文書館・図書館事情について紹介した。モスクワは大都市であり、利用すべき施設が市内ばらばらに点在しているため、特に短期滞在の場合は事前に情報収集をして綿密な行動計画を立てることが望ましい。モスクワに長期滞在して実感したのは、アルマトゥやビシュケクでの資料収集で見えてくるものとは全く別の視座が得られることである。上述した通り、ЦГА ПД КРでクルグズスタン

---

<sup>(13)</sup> 紙幅の都合上、各図書館の利用方法等の情報は省略する。各図書館のHPを参照。レーニン図書館 (<http://www.rsl.ru/>)、歴史図書館 (<http://www.shpl.ru/>)、ИНИОН (<http://www.inion.ru/>)、農業図書館 (<http://www.cnsbh.ru/>)。

共産党中央委員会の文書を時間軸に沿って読み始めていたが、今回の滞在でモスクワの文書を出発点として、共和国の文書を①モスクワでも検討された案件、②共和国で処理された案件に区別して読むという順番にしたほうが、連邦・共和国関係を考える上で効率的だということが分かった。但し、これはあくまでソ連邦の中央集権的な行政システムがすでに完成していた戦後期の中央アジア政治史についての話である。現在、すっかり筆者の頭の中はソ連「帝国」中枢の党官僚の感覚で満たされているのだろうが、今後は再びカザフスタン・クルグズスタンに戻り、現地感覚を再び取り戻し、「帝国」中枢と共和国での現場の考え方の差異を詳らかにしたいものである。

最後に、モスクワ「生活」については日露青年交流センターのHP (<http://www.jrex.or.jp/>)に滞在記をまとめているのでそちらを参照、受け入れ機関のロシア国立人文大学のビザ手続きについては上述の濱本真美氏の報告を参照していただきたい。

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)